

ル・ミュール(le mur : 「壁」)

古い時代に出会う喜びがいくこの街にもある。しかしそれらが王侯・貴族生活臭に粉飾されているばかりだと、とたんにぼくの興味からは遠のいていく。やはり時代時代の社会の実相をすべて写す、それも活写ではなく残滓を残し香とする古い時代がぼくにとっての「パリらしさ」なのだ。その点から言ってもパリ 5 区はぼくの散策の格好の対象となる街である。そこでは、ぼくらの精神形成の生活に密接に関わる「古き時代」をここかしこに見いだすことができるのも、心惹かれる源泉なのであろう。

建築物では、あまりにも有名なパンテオン。フランス革命の夜明け期のジャン・ジャック・ルソーとヴォルテールの棺が通路を隔てて向かい合っている。まさに論争の好敵手同士が左右を分かっている感じである。ユゴーとゾラとが並んで安置されているのも、彼らの生前の密接な関係を示している。パンテオンは国民議会でそこに安置することを決定したフランス共和国にとって極めて意味のある人々の魂が眠っている霊廟である。

ところで、パンテオンに象徴されるように、フランスという国は、「個人名」を極めて大切にする。たとえば、通りの名前や広場の名前はかれこれの「個人名」がつけられているのを多く見いだすことができる。そのことがまた、ぼくにとっては「古き時代」を偲ばせることとなる。

エコール通りとモンジュ通りとが交差するところにランジュヴァン広場がある。くの字型というやや変形である。広場の四周がすべて道路となっているパリの大方の広場とは違い、二つの道路と建物の壁に挟まれて広場が作られているのだ。子どもの遊戯施設もささやかながら整えられており、幼い子どもたちが遊ぶ姿をしばし楽しむことができる。モンジュ通りを表通りとすれば、入り組んだパリの街のこと、そこから少し入れば細い道、短い道がさまざまな形状で交差したり、突き当たったりしている。J. H. ペスタロッチ通りは総計 100 メートルにも及ばない短くかぎ状の小路である。地名・道路名などは議会の決議を得て付けられるというから、かつて、これらの街々に住む人たちが、それぞれの「哲学」をもとにして、通り名を考えたのだろう。ラ・コミュヌ（「パリ・コミュニケーション」）の史跡や資料を求めてパリ市内をうろつくようになってからはそのゆかりの名前や広場を意識し

て探すようになった。たとえば、モンマルトルの丘（サクレクール寺院のあるところ*）の近くに、J. B. クレマン広場が確認できる。彼は古いフランスシャンソン「サクランボの実る頃」の作者であり、ラ・コミユン議会の議員、教育委員会のメンバーでもあった。だが、パリ 5 区内ではラ・コミユンゆかりの人名に出会うことはないのが残念と言えれば残念なことである。建築物は別にして、広場や道路に既知の名前、ぼくに何らかの関わりのある人名、具体的にイメージすることができる名前などを見いだすたびに、それを示すらしきものを探すわけであるが、もちろん何もない。ランジュヴァンにしてもペスタロッチにしてもその近在に生活をしたり働いていたという事実がないからだ。

「個人名」がまさにその地にとって意味を持っているものがある。正確に表現すれば、石造りの建築物のル・ミュール（「壁」）にはめ込まれているパネルこそ、フランスが「個人名」を大切にしている証である。

12 世紀に建築された旧パリの城壁が少し残っているあたりの、キャルディナル・ルモア一又通りの古ぼけたアパルトマンの壁に、ヘミングウェイが住んでいたことを証すパネルがはめ込まれている。Ernest HEMINGWAY (1899-1961)。「1922 年 1 月から 1923 年 8 月まで、この建物の 3 階に妻 Hadley と住まう。アメリカの小説家。」とのガイドがある。ヘミングウェイについての思い出は、彼の作品に没頭した青・少年期もそうであるが、40 代に入ってから毎年のように出かけるアメリカ合衆国カリフォルニア州モントレイ市のことである。モントレイはラッコやアザラシなどの海獣が自然状態で保護されていることで名が知られているし、ぼくのそこへの旅の大きな目的はまさにそれらの自然観察である。しかし、歴史が浅いと言われるアメリカ合衆国ではあっても、モントレイ市は海を舞台とした激しい歴史を持っている。ヘミングウェイはそれを題材にして文学を多数生産した。街にある

* 日本で発行されている観光ガイドブックには、「1870 年のパリ・コミューンのあと・・・云々・・・」とこの寺院の設立経過を綴っているものがある。「パリ・コミューン」は 1871 年だからこのガイドブックの記述は誤りである。それはともかくとして、サクレクール寺院設立が国民議会で投票の結果決められたのは 1873 年のこと。フランス共和国が第 3 共和政体性であったにもかかわらず未だ第 3 共和国憲法は定められていない時期のことである。ナポレオン III 世が退帝して第 3 共和制に入るが（1870 年）、政治権力は教会保守勢力（王政派を含む）、帝政派、共和派などに入り組み錯綜していた。「パリ・コミューン」の鎮圧は教会保守勢力、帝政派権力の勝利を意味していた。サクレクールの建設はその勝利の証と見ることができるのである。もちろん、「モンマルトルの丘」は「パリ・コミューン」の象徴であることも建設の意義のうちに入る。

サクレクール寺院内の、寺院設立経過のパネルには、こうした歴史的経過は書かれておらず、1873 年の国民議会の多数派投票によって決定したことから説明されている。ガイドブックといえども大きな「観念」を形成するものになるのであるのだから、書くならきちんと確かめるべきであろう（少なくとも年代を間違えるなどという基本的な誤りを犯すことは問題外）。しかし、それは、少なくとも非当事者が歴史解釈を加えることになってしまう。やはり、サクレクール寺院内のパネルを忠実に紹介することに留めるべきだろう。

図書館や書店にはヘミングウェイコーナーが設けられており、また、歴史博物館にもヘミングウェイコーナーがある。ル・ミュールのパネルは、モントレール旅行の数々を走馬燈のように思い出させてくれた。

この通りに突き当たり、モンジュ通りから入る通りのひとつはロラン通りという。ロラン通りは、やや現代風に「お色直し」がされてはいるが、それでも昔ながらのパリを偲ばせてくれる。モンジュ通りから始まるロラン通りの入り口には水汲み場がある。水汲み場の両側から階段が上っている。階段を上がると、中央部がふくらんだ直径 3 メートルほど深さ 15 センチほどのプールに出会う。プールとはいってもここに水を溜めるのではなく、道路から流れ込んだ水を下水道に流し込むための「施設」である。下水口（排水口）がプールのいくつかの壁に開いている。プールの一カ所はロラン通りの中央を走る緩やかな V 字溝とつながっている。いや、ロラン通りそのものが緩やかな V 字型をしているのだ。そしてなだらかな傾斜をしプールの方に下っている。通りに捨てられたゴミ、犬の糞などが水で流される。それらは道路中央部の V 字の底部（排水溝）に集まり、さらに強い水流でプールのところまで流されていく。プールから先は下水道へと導かれるのである。パリの街の大通りから入った裏街には、かつて、ここかしこに水流を利用した清掃「施設」があった。しかし、ロラン通りのそれはやや特殊なのかもしれない。というのは、パリ 4 区のヴィラージュ・ドゥ・サン・ポール近辺（骨董屋街として観光のメッカになっている）の目立たない路地裏に残されている V 字溝兼道のたたずまいは、表通りから入る小道の突き当たりの建物の壁が水汲み場になっている。洗濯もそこでしたようである。その水汲み場からそのまま V 字溝の石畳小道となり、表通りのマンホールへと排水できるように緩やかに傾斜して下っている。こうした光景は思いがけないところで見つけることができるのである。

☆ ☆

この日の散策はモンジュ通りとは反対側のロラン通りの終点、すなわちキャルディナル・ルモアヌ通りを起点とするロラン通りからモンジュ通りへと進んだ。左右に建つ建築物を眺めながらその建築年代を推測することも散策の楽しさである。明らかにナポレオンⅢ世期のオスマン改革から逃れることができた建築物が並んでいる。多くの場合、建築年月が壁に刻み込まれているので、その推測の結果の当否はすぐに分かるのであるが、ここにはその年月を示す数字は刻まれていなかった。その代わりではないのだが、ぼくの意識としてはその代わりという推移がなされる。

ロラン通りを入ってすぐ左手の建築物の壁に、デカルトのパネルがはめ込まれていた。「ここに RENÉ DESCARTES (ルネ・デカルト) 1596-1650 が住んでいた。オランダでフランス哲学を打ち立てた。1644 年、1647 年および 1648 年のパリ滞在中、この家の 0 階に住んでいた。」とある。ぼくの高校時代はバンカラを気取ることが青年期の象徴であったが、学園祭などの一大イベントの前夜祭後夜祭で、大きく燃え上がる炎のせいばかりではなく熱い思いで、先生方や級友たちと肩を組み、蛮声を張り上げ、「デカンショ節」を歌った。「デカンショ」とはデカルト・カント・ショウペンハウエルを縮めたもので、「デカンショ、デカンショで半年暮らす、ヨイヨイ、後の半年やあ寝て暮らす、ヨイヨイデッカンショ」で始まる。身近の人間関係・社会関係を戯画歌にしたものだ。戦前の旧制中学時代から続く高校の諸行事の際に歌われる伝統歌であった。だらしのないものでぼくがデカルトと出会ったのはそれが初めてであり、彼の哲学にささやかにでも触れたのは大学生活も後半の、ほんの線香花火のようなものだった。ちなみにデカルトのスペルをこのパネルで初めて知るといってお粗末さである。それでも若い時代に触れた事実は、それから数十年の時を隔て、国を隔ててはいるというものの、まことにデカルトに対して失礼な感情ではありながらも、再会という念に駆られる。

デカルトのパネルを離れてモンジュ通りの方向に進む。しばしV字型の道路に敷き詰められた石畳を楽しむ。日常の速度ではものの 5 分も歩かないうちに、終点、先ほどのプールに到る。その近くの建物にはめ込まれたパネルには、「Benjamin Fondane ベンジャミン・フォンダヌ(Jassy 1898 -Auschwitz 1944) フランスの詩人、哲学者。1932 年 4 月 15 日から 1944 年 3 月 7 日まで、この家に住んでいた。」とある。残念ながらこの人物についての知識は何も持っていない。ぼくは「詩人」という言葉を見ただけで尻込みをする習癖があるので、通例ならば、このパネルを一瞥してこの場を去るはずである。しかしながら、Auschwitz (アウシュヴィッツ) の文字がしばらくぼくを釘付けにさせた。パネルにはそのことの意味については一言も触れられていない。しかし、1944 年 3 月 7 日か 8 日、この建物の住民の一人であった詩人・哲学者が、当時パリを占拠していたドイツ・ナチスの手によってこの家から引き出され、アウシュビッツに送られ「シャワーを浴びせられ」て殺されたことは隠すべくもない事実である。ペール・ラシェーヌ墓地にはナチによって殺された人々が、その出自ごとに、メモリアルに刻み込まれている。パネルの前で、一時を、ぼくの父も戦い死んだかの第二次世界大戦に思いを馳せた。だが、悲しいかな、ぼくが日本人であるせいなのか、「ナチ」や時のフランス政府権力の歴史的「重さ」を実感するまでにはいたら

なかった。

この感性の鈍さをハンマーでたたかれるような衝撃と、まもなく、出会うことになる。

ロラン通りの散策を終えてモンジュ通りへの階段を下りようとした時、その小さな路地裏のたたずまいの全容をもう一度確かめようと振り返った。すると、デカルトとフォンダヌのそれぞれのパネルの中間ほどのところにフランス国旗が掲げられた建物のあることに気づいた。気づかずに通り過ぎていたのだ。足をそこに戻してみるとにぎやかな子どもの声が間近に迫った。学校である。「自由、平等、友愛」の文字が刻まれたパネルの下に、小学校（エコール・エレマンテール）とあるだけだ**。学校の大きなドアの右隣に真新しいパネルがはめ込まれているのを見つけた。そこにこの学校の歴史案内があるに違いないと思い近づいた。すると、

「子どもたちを記念して、

この学校の生徒たちは、

1942年から1944年に、強制収容所に送られた

彼らがユダヤ人に生まれたが故に、

無実の犠牲者

残虐なナチの

そして積極的な加担

ヴィッシー政権の。

彼らは皆殺しにされた

死の収容所で。

けっして彼らを忘れない。

2003年1月11日」

パネルを逐語訳したのがこれである。パネルはまさに真新しい。ぼくがこれを目にした

** フランス共和国の学校名は、人名や通り名が付けられることが多い。公立学校の場合に、ただ「小学校」と書かれているのは、公文書には通り名が付けられる。ぼくがこのパネルを見た小学校は、ロラン通りにあるのだから、ロラン通り小学校、ということになる。

のが 2003 年 3 月 11 日。パネルの設置はちょうど 2 ヶ月前のことである。このパネルが何故、この時期にあつらえられたのか、それは不明である。ただ、同じように真新しいメモリアルパネル—文面はほんの少し異なっているのだが—をパリ 4 区のマレ地区にあるアヴェ・マリア通りの小学校でも見かけた。アヴェ・マリア通り小学校のパネルは 2002 年 11 月 16 日の日付が入っていたから、パリ全市で設置したのかもしれない。それにしても、このパネルの示す事実はなんと重いことだろう。「個人名」は全くない。しかしながら、このパネルの文字一つひとつには、ここから強制連行され収容所に送られガス室に送られて殺された一人ひとりの命が刻まれているのを感じる。そういえば、2 年ほど前にも同じようなパネルを目にしたことがある。中国人街と呼ばれる地域に行った時、「この街に住んでいた 1000 人余の子どもたちが強制収容所に送られ殺された」とパネルに示されていたのを思い出す。

パリの街のあちこち、いや、フランスの街のあちこちに見られる「ナチ」の文字、そして「子どもたち」の文字。それ以外にも、フランス革命、第一次世界大戦、第二次世界大戦、アルジェリア戦争など、フランス共和国史に刻まれたさまざまな「忌まわしく、時には誇り高い」戦火によって命を失った者の名前は、コミュヌごと、教区ごと、学校など公共機関ごとなど、それぞれの建築物の外壁、内壁に刻まれている。「壁」に刻み込まれた「個人名」は「ここに一つの命ありき」と強く訴えかけてくる。我が国の忠魂碑もそれに入るのだろうが、ぼくは、それに、「壁」の持つリアリティを感じるができない。

今まさに、まだ惨劇を繰り返したいと、願っている強い力が確かにある。その強い力が住む街の壁はただのミュール（mur: 壁）、外敵から防ぐだけのものしかないのだろう。惨劇を二度と繰り返さないと誓う街のミュールは、ここに命ありと、強く表白する意味のあるル・ミュール（le mur: 「壁」）。命もさまざま。生き生きとした命、引きちぎられた命……。それらを刻み込むフランスの「個人名」の尊重の姿勢は、ぼくの中にはなかったひとつの衝撃的な文化である。